



ダスキンは視覚の軽運動をサポートしています。

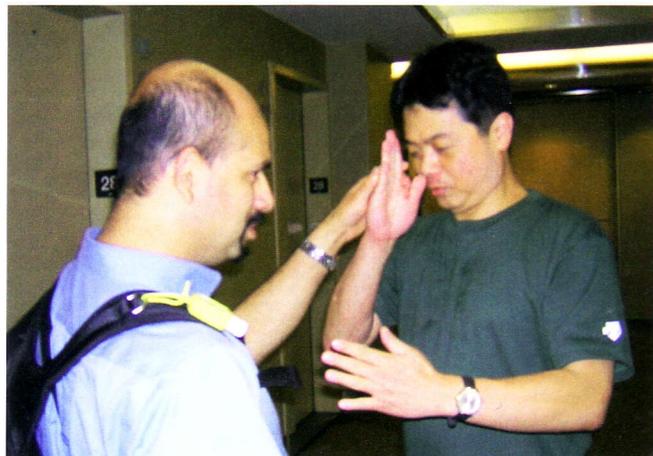
ヘレンケラーの ような人の存在を 多くの人に知ってほしい。

第8期ダスキン障害者リーダー育成海外研修派遣生

1989年/アメリカ合衆国

現:NPO法人 視聴覚二重障害者福祉センター すまいる 理事長

門川 紳一郎さん SHINICHIROU KADOKAWA



パビンと出会ってたくさんさんの勇気をもらいました。

視聴覚二重障害者(盲ろう者)の総合的リハビリテーションセンターとして世界的に名高いニューヨークのヘレンケラーナショナルセンターに研修に行つて数週間後、指点字^{※1}や通訳を担当してもらつてきた支援者が急病で帰国した。突然の出来事で直ぐに交代要員が見つからず、一人で行動することに。困つたことに、アメリカでは手話がコミュニケーションの方法。日本で使つていた指点字は通用しないので研修もままならない状態でアルファベットの指文字^{※2}をから学び始めました。



大震災で心が暗くなる今だからこそ、人と人との繋がりができること、できないことをカバーし合い、手をつないで前向きに進んでいきたいです。

NPO法人すまいる設立時からの協力メンバーです。



Profile

大阪府出身。大学卒業後の1989年1月~3月、第8期研修派遣生として米国ヘレンケラーナショナルセンターで研修。'90年から4年間、米国のギャローデット大学、ニューヨーク大学へ留学。'99年に設立したNPO法人視聴覚二重障害者福祉センターを通じて積極的に活動している。

そんな中、忘れられない出会いもあった。

ボストンのパーキンス盲学校で知り合った全盲ろう(全く見えず聞こえない)のインド人留学生

Nothing about us without us.

「私達のことを、私達ゆきで決めないで」障害者権利条約づくりのスローガン。考え方を大きく変えられました。

「彼(パビン)は英語とアメリカ手話ができてどこへ行くのも一人。暗算も早くパソコンにも長けていてスーパーマンのようでした。パビンの真似はできないけど、手話をマスターしてもっとアメリカで学びたい」。手話の形を手で触れ、わからない時は指文字で単語を示してもらいながら時間をかけて二つずつ覚えていった。

1990年に再び渡米。大学で聴覚障害のリハビリテーションについて学んだ。「アメリカに行つて一番変わったのは障害に対する自身の受けとめ方です。それまで「障害」に否定的なイメージがあったが、アメリカでは説明のための用語として、誰もが誇りをもって発言していた。「盲ろう者はサポートが必要ですが、震災などいつ二人で生きなければならぬ状況が来るかわかりません。そのためにも人生の喜怒哀楽を存分に感じながら暮らせる場所を築くことが目標です」。

※1:両手甲に左右の人差し指、中指、薬指で点字タイプライターのように点字を打つもの。

※2:指をいろいろな形に組み合わせて文字の代わりになる符号。